

大学適応と個人志向性・社会志向性との関連

The Relationships among Adjustment to College Life, and Individual and Social Orientedness

東平 彩亜[†], 松本 麻友子^{††}, 大庭 丈幸^{†††}, 齋藤 菜月^{††††}, 杉浦 悠子^{†††††}, 甲村 和三[†]
Saea Tohira, Mayuko Matsumoto, Takeyuki Oba, Natsuki Saito, Yuko Sugiura, Kazumi Kohmura

Abstract Individual and social orientedness were proposed to capture the two processes in adjustment: personalization and socialization. In this study, the relationships among these two concepts and adjustment to college life were examined. As results, these two concepts had a close relation to adjustment to college life and explained some aspects of it.

1. 問題と目的

近年、大学への適応に問題を抱える学生が増えていると言われている。我が国における中途退学率の増加傾向はその1つの表れとみることもできるだろう。樋口¹⁾によれば、休学事由として多いのは精神的な理由、交友関係、金銭的な理由であり、退学理由として多いのは、一身上の都合、勉学意欲をなくした、怠学により卒業できない、就職が決まった、他校への進学・編入などである。松井・中村・田中²⁾は、大学生を対象とした調査から大学不適応に影響する要因が、友人関係の希薄さ、授業理解の困難さ、入学目的の曖昧さであることを指摘している。このように、学生が直面している課題は主には学力面の不適応と、大学での人間関係や社会生活における不適応に整理されると考えられる。

これらの課題について、濱名³⁾は、大学新生が入学後に困ったことについて、4月から10月の継時的変化を検討したところ、学習スキルについては著しく改善されているものの、授業時以外のキャンパスでの過ごし方といった適応面ではほとんど変化が見られないことを示している。谷島⁴⁾も、大学が様々な対応策を考え、実施することは学生にとって望ましいことであるが、大学の対応の多くは、FDやレメディアル教育などの学習面が重視され過ぎているのではないだろうかを指摘している。

今後は人間関係や社会生活に適応困難を抱える学生への対応についても考えていく必要があるだろう。

しかし、近年の学生が大学における人間関係や社会生活に適応困難を抱える原因について検討した研究はまだ少ない。そして、重松⁵⁾が、青年期の発達課題に問題を抱える学生が増加していることを報告しているように、それらの研究の多くは「大人になりきれない学生」が増えていることを指摘するにとどまっている。このような現象を「大学生の幼稚化現象」と呼ぶ研究者もいる⁶⁾。

そこで本研究では、どのように大人になりきれないのかを検討するため、青年期的人格形成過程は、社会や他者に志向しながら周りに適応していく過程と、自己の内面を志向しながら自己を確立していく過程という2つの志向性が相互補完的に作用するものとしてとらえる考え⁷⁾に基づき、学生の発達を社会志向性と個人志向性の2側面から捉え、大学適応との関連について探索的に検討する。社会志向性とは、社会適応や文化適応を終着点とし、他者あるいは社会の規範に則った生き方への志向性である。個人志向性とは、独自の基準を尊重し、個性を活かした生き方への志向性であり、その終着点としては自己実現が想定される⁷⁾。それぞれの志向性に対する満足度の指標として本研究では他人への信頼感、自分への信頼感についても合わせて測定し検討する。

2. 方法

2・1 調査対象者

大学生118名(男性111名,女性7名)。学年の構成は1年27名,2年63名,3年20名,4年8名であった。

† 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)
†† 名古屋大学 教育発達科学研究科 (名古屋市)
††† 名古屋大学 環境学研究科・JSPS (名古屋市)
†††† 名古屋大学 環境学研究科 (名古屋市)
††††† 愛知淑徳大学 心理医療科学研究科 (長久手市)

2・2 実施時期・方法

2015年1月から3月にかけて、「大学生の意識調査」として、授業時間を利用して一斉に実施した。

2・3 質問紙の構成

フェース・シートにおいて、インフォームド・コンセントを十分に行った。研究協力の同意が得られた学生は、続けて学年、年齢、性別が尋ねられた。質問紙は、学校への適応感尺度⁸⁾、個人志向性・社会志向性尺度⁷⁾、信頼感尺度⁹⁾の3つの尺度から構成された。学校への適応感尺度は30項目であった。下位尺度は、居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感、劣等感のなさの4つであり、5件法で実施した。個人志向性・社会志向性尺度は17項目であった。下位尺度は個人志向性、社会志向性の2つであり、5件法で実施した。信頼感尺度は24項目であった。下位尺度は不信、他人への信頼、自分への信頼の3つであり、4件法で実施した。最後に本調査に対する感想やコメントを求め、すべての回答を終えるのに必要な時間は15分程度であった。

3. 結果

学校への適応感尺度については、合計得点と下位尺度得点を、その他の2つの尺度については下位尺度得点をそれぞれ算出した。すべての調査対象者の平均値、標準偏差を求め、平均値±3標準偏差を基準に外れ値を設定し該当するデータを除外した。それぞれの基本統計量はTable 1に示す。

3・1 各尺度得点と学年の関連

学年(1年・2年・3年・4年)を要因として参加者間のANOVAを実施した。その結果、有意な効果は確認されなかったものの、被信頼感・受容感($F(3, 109)=2.34, p=.078$)と劣等感のなさ($F(3, 108)=2.23, p=.089$)においてそれぞれ学年の主効果が有意傾向であった。有意傾向が確認された主効果について補足的にBonferroni法による多重比較を行ったところ、劣等感のなさにおいて4年生とそれ以外の学年との差が有意傾向であった(Figure 1参照)。

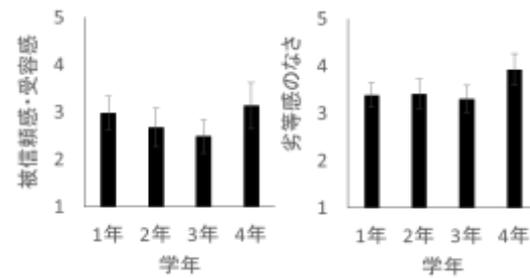


Figure 1. 学年ごとの平均値と標準偏差
左: 被信頼感・受容感尺度, 右: 劣等感のなさ尺度

3・2 大学適応と個人/社会志向性との関連

個人志向性・社会志向性尺度の下位尺度得点について、それぞれ5件法の中間点にあたる3点を基準に高群・低群に配置した。各群の人数をTable 2に示した。個人志向性・社会志向性共に高い群の人数が最も多く、どちらの志向性でも、高群の方が低群に比べて多かった。 χ^2 検定を行ったところ、有意な結果は得られなかった($\chi^2(1)=2.374, n.s.$)。個人志向性得点と社会志向性得点との相関係数を算出したところ、有意な正の相関が示された($r=.332, p<.001$)。

Table 2. 個人志向性×社会志向性の高群・低群人数分布

		個人志向性		合計
		高	低	
社会志向性	高	72	30	102
	低	3	5	8
合計		75	35	110

信頼感尺度の下位尺度である他人への信頼、自分への信頼についても同様の分析を行った。基準は4件法の中間点にあたる2.5点であった。結果をTable 3に示した。個人志向性・社会志向性と同様に、自分への信頼・他人への信頼共に高い群の人数が最も多く、どちらの信頼でも、高群の方が低群に比べて多かった。 χ^2 検定の結果が有意で($\chi^2(1)=18.576, p<.01$)、残差分析を行ったところ、どちらの信頼も共に高い、もしくは低い群において5%水準で実測値が期待値よりも有意に多く、そうでない群において有意に少ないことが示された。自分への信頼得点と他人への信頼得点との相関係数を算出したところ、有意な正の相関が示された($r=.536, p<.001$)。

Table 3. 自分への信頼×他人への信頼の高群・低群人数分布

		自分への信頼		合計
		高	低	
他人への信頼	高	74	16	90
	低	9	16	25
合計		83	32	115

Table 1. 各尺度の基本統計量

	大学適応感			個人志向性・社会志向性			信頼感			
	大学適応感	居心地の良さ	課題・目的の存在	被信頼感・受容感	劣等感のなさ	社会志向性	個人志向性	不信	他人への信頼	自分への信頼
平均値	3.35	3.47	3.70	2.74	3.42	3.70	3.20	2.42	2.90	2.75
標準偏差	0.52	0.71	0.64	0.80	0.60	0.57	0.61	0.45	0.52	0.49
人数	108	115	117	113	112	115	113	117	116	117

Table 4. 大学適応と個人/社会志向性との相関

	大学 適応感	居心地 の良さ	課題・目的 の存在	被信頼感・ 受容感	劣等感の なさ
個人志向性	.415**	.242*	.501**	.372**	.250**
社会志向性	.500**	.424**	.504**	.395**	.230*
自分への信頼	.434**	.334**	.386**	.377**	.159
他人への信頼	.507**	.480**	.419**	.403**	.269**

** 1%水準、* 5%水準でそれぞれ有意

個人志向性・社会志向性、並びに他人への信頼・自分への信頼尺度得点と適応感尺度得点との相関を算出した。劣等感のなさとは自分への信頼との間を除いて、有意な正の相関が確認された (Table 4 参照)。

個人志向性、社会志向性の高群・低群で、それぞれ大学への適応感に有意な差がみられるかどうか対応のない *t* 検定を行ったところ、個人志向性の高群と低群の間では、劣等感のなさを除いて ($t_{(106)}=1.97, p=.052$), すべて有意な差が確認され、大学への適応感個人志向性高群において、低群に比べ有意に高いことが示された (大学適応感: $t_{(103)}=3.57, p<.01$, 居心地の良さ: $t_{(109)}=2.44, p<.05$, 課題・目的の存在: $t_{(110)}=3.85, p<.01$, 被信頼感・受容感: $t_{(106)}=3.34, p<.01$)。社会志向性については、大学適応感 ($t_{(103)}=2.048, p<.05$), 居心地の良さ ($t_{(110)}=2.33, p<.05$), 課題・目的の存在 ($t_{(112)}=2.46, p<.05$) において有意に高群で低群に比べ適応感が高いことが示されたが、劣等感のなさ ($t_{(107)}=1.26, n.s.$) や被信頼感・受容感 ($t_{(108)}=1.41, n.s.$) では有意な差が確認されなかった。

同様の分析を信頼尺度についても行ったところ、自分への信頼については劣等感のなさを除いて ($t_{(109)}=.86, n.s.$), すべて有意な差が確認され、大学への適応感自分への信頼高群において、低群に比べ有意に高いことが示された (大学適応感: $t_{(106)}=4.06, p<.01$, 居心地の良さ: $t_{(112)}=3.89, p<.01$, 課題・目的の存在: $t_{(114)}=2.47, p<.05$, 被信頼感・受容感: $t_{(111)}=2.88, p<.01$)。他人への信頼についても同様に劣等感のなさを除いて ($t_{(108)}=1.93, p=.056$), すべて有意な差が確認され、大学への適応感他人への信頼高群において、低群に比べ有意に高いことが示された (大学適応感: $t_{(106)}=3.74, p<.01$, 居心地の良さ: $t_{(112)}=4.09, p<.01$, 課題・目的の存在: $t_{(113)}=2.29, p<.05$, 被信頼感・受容感: $t_{(110)}=2.99, p<.01$)。

個人志向性と自分への信頼がどのように大学への適応感に影響しているのかを明らかにするため、適応感尺度を従属変数に、個人志向性 (高・低) × 自分への信頼 (高・低) の ANOVA を行った。大学適応感については、個人志向性の主効果 ($F_{(1, 101)}=3.921, p<.05$), 自分への信頼の主効果 ($F_{(1, 101)}=8.89, p<.01$) が有意で、これらの交互作用については有意でなかった ($F_{(1, 101)}=2.17, p=.144$)。補足的におこなった下位検定の結果、個人志向性高群にお

いてのみ、自分への信頼高群が低群にくらべ適応感が有意に高いことが示された (Figure 2 参照)。居心地の良さでは自分への信頼の主効果のみが有意 ($F_{(1, 106)}=9.15, p<.01$) で、課題・目的の存在と劣等感のなさでは個人志向性の主効果のみが有意であった ($F_{(1, 107)}=6.11, p<.05$; $F_{(1, 103)}=4.03, p<.05$)。被信頼感・受容感では、個人志向性の主効果のみ有意で ($F_{(1, 104)}=4.29, p<.05$), 自分への信頼の主効果 ($F_{(1, 104)}=2.61, p=.109$), これらの交互作用 ($F_{(1, 104)}=2.08, p=.152$) は有意ではなかった。補足的に行った下位検定の結果、自分への信頼高群における個人志向性の高群/低群、個人志向性高群における自分への信頼の高群/低群の差が有意であった (Figure 3 参照)。

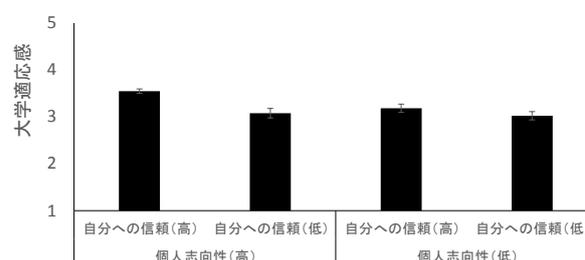


Figure 2. 個人志向性×自分への信頼の各条件の大学適応感尺度得点の平均値と標準誤差

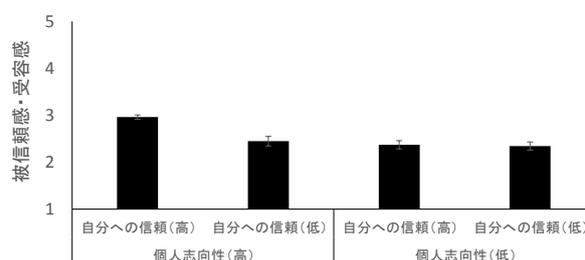


Figure 3. 個人志向性×自分への信頼の各条件の被信頼感・受容感尺度得点の平均値と標準誤差

4. 考察

本研究の目的は、大学適応と個人志向性・社会志向性との関連について検討することであった。

まず現在の大学生における個人志向性・社会志向性について確認したところ、伊藤¹⁰⁾における20代男性の平均値と大きく変わらない結果が本研究においても得られた。個人志向性と社会志向性との相関の強さについてもほぼ同じである。それぞれの志向性における平均値に学年による違いは確認されなかった。伊藤¹⁰⁾によれば、これらの得点は10代から20代の間で増加し、それ以降はあまり変化しない。このことから本研究からは個人志向性・社会志向性は大学生活の中でそれほど変化しない個人特性である可能性も考えられる。しかし、大学への適応時期に関する多くの先行研究^{11), 12)}が、ほとんどの学

生は1年生の夏休み頃までに概ね大学生活に適應することを示していることや、1年生はまさに10代と20代の狭間であることを考えると、学年による変化はみられないとしても、入学当初から夏休みにかけての大学適應期に、これらの志向性の変化が大学への適應に關与している可能性は否定できない。実際、大学適應感と個人志向性・社会志向性との間には有意な相関が確認されている。本研究では、大学への適應感における学年による違いははっきりとは確認できなかった。先行研究では多くの場合、学年が上がるにつれて大学への適應感は増加する。このことを考えると、年度末という実施時期が少なからず、志向性にせよ適應感にせよ、学年による違いを相殺する方向で影響している可能性が考えられる。

個人志向性と社会志向性との關係を比較すると、社会志向性についてはほとんどの学生が高い値を示すのに対して、個人志向性については、社会志向性ほど人数の分布が極端ではないことがわかる。これは、大学生活に適應するために心がけていることとして学生から「相手を傷つけないように気をつける」、「相手が嫌がることをしない」、「素の自分をみせない」といった回答が多く見られることや、「友人との關係」が大学適應における重要な要因と指摘されていることとも關連があるだろう⁸⁾。外的適應が内的適應にしばしば先んじることは古くから多くの研究によって指摘されている⁷⁾。例えば、鏡映性自己は社会的志向性を高め、個人が周囲から要求され期待されている行動様式を身につけ築き上げる自己であり¹³⁾、社会化を通して自己が築き上げられていく典型とも言えるだろう。一方で、重松⁵⁾は、大学生のなかに衝動性が強く、自己の存在に不安を感じ、またひとりであることを極端に恐れ、絶えず他者を巻き込まずにはいられない境界例的な人が増加していることを報告している。また、近年、過剰適應が注目を集め、深刻な問題になりつつある¹⁴⁾。過剰適應とは、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとしたり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応えようと努力をしたりすることである。これらをふまえると、一見、大学への適應が十分になされているように見えても、社会志向性が高く、個人志向性が低い両志向性のバランスがまだ十分にとれていない学生の多くは十分な注意が必要なのかもしれない。伊藤¹⁵⁾も、発達とは2つの志向性が単に量的に高まるだけでなく、両者がバランスよく成長することが望ましいと考察している。大学適應についても様々な形の適應があることに注意し考慮する必要があるだろう。また、信頼感の結果を見ると、他人への信頼は高くとも自分への信頼が低い人、自分への信頼が高くとも他人への信頼が低い人の人数が、それぞれどちらも

高いか、どちらも低いかのどちらかに流れる傾向が示されている。自分も他人も十分に信頼できる人数が多い分には特に問題ないが、自分も他人も信頼することができない人が多く、更に大多数の人は社会志向性が高いとすると、周囲に合わせて自分を意識的に、無意識的に押し殺すことがつづき、精神的な負担も大きく、仮に外的適應がうまく行っていたとしても内的適應まで進めることが難しい。これらのことを考えると、今後は個人志向性にも学生の関心を向けるアプローチが必要なのかもしれない。

個人志向性・社会志向性と適應との關連については、まず先行研究¹⁶⁾で大学の適應を考える上で重要な概念の1つとして考えられていた劣等感との關連があまり強くないことが示された。大学生は自己承認を重視するようになると友達づくりの下手さに劣等感を感じるようになることが報告されている¹⁷⁾。これによれば自己志向性とも社会志向性とも劣等感のなさは關連が見られてもおかしくない。本研究で、あまり關連がみられなかったことについて主には実施時期の問題が考えられる。年度末であったこともあり、自省報告において「1人でも大丈夫だと思えるようになった」という友だちづくりの下手さに対する諦めにも近い、一見、克服したかのような回答もみられた。年度末になると、既に友人關係は出来上がっており、新たに友人を作るのにはかなりの困難を伴うのだろう。次に、社会志向性は居心地の良さ、個人志向性は課題・目的の存在や被信頼感・受容感といったそれぞれ異なる側面の大学適應感と關連が強いことが示唆された。そして、個人志向性と自分への信頼感との關連からは個人志向性が高い場合に自分への信頼感の影響が確認されることが示唆された。これらについては、今後十分なサンプル数をそろえ、より詳細に慎重に検討していく必要がある。まずはこれらの關係性を明らかにしていくことで、2 志向性という観点から大学適應のメカニズムの一端を明らかにし、いずれは効果的な介入方法の提案にもつなげることができるだろう。

5. 引用文献

- 1) 樋口康彦: 大学生の適應に影響を与える要因に関する考察, 國際教養学部紀要, 3, 97-102, 2007.
- 2) 松井洋, 中村真, 田中裕: 大学生の大学適應に関する研究, 川村学園女子大学研究紀要, 21 (1), 121-133, 2010.
- 3) 濱名篤: 学生の多様化するニーズに対応した初年次教育, 財団法人私学研修福祉会主催平成 17 年度大学の教育・授業を考えるワークショップ資料, 2005.
- 4) 谷島弘仁: 大学生における大学への適應に関する検

討, 人間科学研究, 27, 19-27, 2005.

5) 重松晴美: 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究—境界例心性を通して—, 心理臨床学研究, 22, 659-664, 2005.

6) 白石大介: 大学生の幼稚化現象—その背景と課題—, 武庫川女子大学学生センター紀要, 8, 9-21, 1998.

7) 伊藤美奈子: 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 64(2), 115-122, 1993.

8) 大久保智生: 青年の学校への適応感とその規定要因, 教育心理学研究, 53(3), 307-319, 2005.

9) 佐藤寿仁, 菅原正和: 中学生における学校不適応と信頼感に関する研究, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 6, 207-216, 2007.

10) 伊藤美奈子: 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究, 教育心理学研究, 41(3), 293-301, 1993.

11) 飯田沙依亜, 甲村和三, 舟橋厚, 長谷川桜子, 竹澤大史, 幡垣加恵: 大学生の居場所に関する研究-居場所のなさに着目して-, 愛知工業大学研究報告, 46, 49-55, 2008.

12) 高下梓: 大学新入生の適応感の変化: 4月から7月にかけての初期適応過程, 明星大学心理学年報, 29, 9-19, 2011.

13) Cooley, C. H.: Human nature and social order. New York: Charles Scribner's Sons, 1902.

14) 石津憲一郎, 安保英勇: 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響, 教育心理学研究, 56(1), 23-31, 2008.

15) 伊藤美奈子: 自己受容を規定する理想-現実の差異と自意識についての研究, 教育心理学研究, 40, 165-170, 1992.

16) 甲村和三, 飯田沙依亜: 居場所感のなさ自己肯定感情の関係, 愛知工業大学研究報告, 49, 79-82, 2014.

17) 高坂康雅: 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化, 教育心理学研究, 56(2), 218-229, 2008.

6. 謝辞

本研究は, 愛知工業大学教育・研究特別助成 C を受けて実施されたものである。本調査に協力して下さった大学生のみなさんとあわせてここに謝意を表す。

(受理 平成 27 年 3 月 19 日)